ハリー・ポッターと秘密の守り人

風里

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、彼女はふと思い出した。

自分には前世の記憶があり、また今の自分が未来のヴォルデモート卿、トム・リドルの姉であること、そして今から数十年後に起こる未来の出来事を。

思い浮かぶのは想い人の忘れ形見を命懸けで守り通した『彼』の姿。

――生きて欲しい。闇の中ではなく、今度は光の中で心穏やかに。

彼の心を守り通すと決めた彼女は自分の知る物語のまま裏側で暗躍する。

（彼はそんなこと望まないだろうけど）

これは、矛盾を抱えたままありとあらゆる手段を使い目的を遂げようとする一人の女の話。

※念のためＲ―１５つけてます。

※自サイトで投稿してるものに手を加えて投稿してます。

※原作開始よりだいぶ前から始まります。（所謂爺世代）

※原作沿い目指しますが、オリジナル設定多々出てきます。

目次

幼少期編
はじめの一歩 1
孤独から抜け出した日 5
己のため 8
規格外 13
従者は恐れない 16
思案する 21
様子見と再会まで 25
ホグワーツ特急にて 28
組み分け 31
家族の記憶 35
オブリビエイト 39
ホグワーツ卒業〜
特異点とその裏側で 45
秘密と計画の行方 52

幼少期編
はじめの一歩

１９３５年１月

その日は朝から違和感の塊だった。
ベッドで目を覚ませば、見知らぬ天井が目に入り。寝ていたベッドもどこか埃臭く感じ、色も清潔感のある白ではなく灰色だったし、体を起こせばいつもより視点が低く、部屋も記憶にある自分の部屋ではなかった。
埃臭い部屋に置かれた古い鏡を覗き込むと、真っ直ぐなブラウンの髪で血のように赤い瞳の少女が映っていた。
（あれ、私こんな顔だったかな？）
顔はどことなく見た覚えがあるものだったが、自分の顔であると断言はできなかった。
不思議に思い、首を傾げると鏡の中の少女も同じ動作をした。
（とりあえず一個ずついこう。私の名前は……うん、ジル・リドル。今日で１１歳。両親はいなくて、ここは孤児院……ってあれ、リドル……？）
自分の姓にひっかかりを覚えたジルが再び首をひねっていると、コンコン、と躊躇いがちなノックの音が響く。
疲れたような声の主は、恐る恐るといった様子で扉に向かって声をかけていた。
「……ジル？部屋にいますか？」
（誰かわかんないけど多分私に用事なんだよね？返事した方がいいか）
「はい、います」
「あぁ、良かった。……貴女に手紙が届いてます」
ジルが返事をすると扉を少しだけ開けて僅かな隙間から手紙を差し出した。

「……ありがとうございます」
ジルが手紙を受け取ると、声の主は顔も見せずに逃げるように扉を閉めて去って行った。
上質な紙の封筒に書かれた宛名を見る。

『聖マリア孤児院　２Ｆ　右から3番目―一人部屋
ジル・マールヴォロ・リドル　様
ホグワーツ魔法魔術学校　入学のご案内』

「ホグワーツ……？」
魔法、の文字が目に入った瞬間、ジルの頭の中で一気に過去の記憶が駆け巡った。
かつての自分のこと、好きだった物語、そして自分の最期。
（ハリー・ポッターの世界なの……？）
そのことを自覚した途端、目の前の、目に映る景色が一変していた。
キラキラと光る空間に、何より手紙を持つ自分の手を見つめると、ゆらゆらと波のように揺らめくものが溢れている。
漠然とそれが魔力なんだ、と理解した。
魔法があって、何よりも自分の名前がかかれたこの手紙が、今のこの世界が、今まで自分がいたはずの世界とは違うという明確な証拠になっていた。
（リドルという姓に、ホグワーツ。私はトム・リドルの姉か妹になってる。確かトムは１９２６年に孤児院で生まれたはず。今は１９３６年の１月……この時点で私に入学許可証が届いてるってことはトム・リドルの姉?!私が?!）
パニックになりかけたジルは、落ち着こうと深呼吸してもう一度手紙へと視線を落とした。
蝋で封がされているそれを開けて中の手紙を取り出すと、そこにはやはり昔見た覚えのある文が書かれていた。

『ホグワーツ魔法魔術学校　　校長　アーマンド・ディペット
親愛なるリドル殿
このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。
教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。
新学期は九月一日に始まります。七月三十一日必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。
敬具
副校長兼変身術科教授　アルバス・ダンブルドア　』

（わぁ、本物だー）
若干遠い目をしつつ、同封されていた教材リストにも目を通す。
最後の『七月二五日午後三時、入学前の説明に教員がお伺い致します』という一文に目がいく。
「確かマグル生まれの生徒には説明に回ってるんだっけ……。あれ、でもまだダンブルドアは校長じゃないのか。ってことはまだスネイプ教授も生まれてな……」
そこまで言って、ふと思い出す。
ハリーポッターシリーズを通して〝生き残った男の子〟を陰から守り続けた彼のことを。
（……今ならまだ間に合う。私は、あの人に幸せになってほしい。だから、そのために何を犠牲にしても躊躇わない。私は私の幸せのために、あの人に生きていてほしい。見返りは求めない。彼が愛しい（リー）花に捧げたように、私もまた愛しい蝙蝠にすべてを捧げよう）
ジルはかつての自分が〝普通の人間〟とは違うことを知っていた。
一を聞けば十を理解し、他人の些細な仕草や言葉の端から意図を察することが出来た。
それゆえに少女は〝ヒト〟に失望した。
結局のところ、真の意味で〝ヒト〟が〝ヒト〟を愛することはない

のだと知ってしまったからだ。
だからこそ、彼女は物語という虚構に傾倒した。
剣と魔法の世界、空想ともいえる、現実ではない世界に。
そして見つけたのだ。愛する人のためにすべてを投げ出し、命すら賭けてみせたあの人を。
物語には存在しなかった〝自分〟がこれからの物語にどういう影響を及ぼすかわからないけれど、それでも、と少女は決意する。

（〝私〟はあんな結末赦さない。絶対に、覆してみせる）
不器用で、優しすぎる彼は、私の望む結末を良しとはしないだろうけど。
彼の心が彼女と共に死んでしまったのならば、私が彼の心ごと、彼の想い人も守ろう。
だが、彼女の子供は〝生き残った男の子〟にならなければいけない。
自分の知る道筋から逸れてしまえば、彼を助けられない。
だから彼女には眠ってもらおう。
誰にも知られず、誰にも悟られず、決して見つからない場所で、来るべき日まで。
最低だと罵られても、蔑まされても、嫌われたとしても、例え何を……自分の唯一（とう）の肉親（と）を犠牲にしても。
私は、私の望みのために。
だからさぁ、まずは始めよう。

『――――初めまして、トム。私の可愛い弟』

孤独から抜け出した日

Ｓｉｄｅ：Ｔｏｍ

父に捨てられ、母は壊れた。

気が付いたときには孤児院にいて、不思議なことが度々起こるようになって自分は他人とは違うことを思い知らされた。

僕は自分が他の子供とは違うことを知っていた。

物を浮かせたり、触ることなく誰かを傷つけたり。勿論それ以上のこともやろうと思えば出来た。最初はみんな出来て当たり前だと、ただやらないだけなんだと思っていた。

でも次第に、周囲から向けられる視線でそれが間違っていることに気付いた。

僕は選ばれた人間で特別な力を持っていたから、誰もが僕を恐れて近付かなくなった。

いつも独りだった。寂しいとか、悲しいなんて感情を持ったことは無い。

しつこくちょっかい出したりはしてくるが、大抵いつものように〝お話〟すればしばらくは大人しくしていたし、何より低俗な人間に関わりたくもないから都合が良かった。

くだらない毎日がこれからも続いていくんだと思っていた。

けれど、〝そいつ〟はある日突然やってきた。

「初めまして、トム。私の可愛い弟」

孤児院の中で周りに恐れられていた僕ににっこりと笑って話しかけてきた〝そいつ〟はあろうことか僕を『弟』と呼んだ。

僕が誰の弟だって？と鼻で笑い飛ばしてやろうとしたけれど、それができないくらい僕たちは似ていた。僕と同じ髪色、同じ色の瞳、そして笑い方までそっくりだった。

けれど『姉』と名乗った〝そいつ〟は僕以上に特別だった。

目を合わせた瞬間に、体全体が何かに反応して皮膚がピリピリと痛んだ。

「何の用」
疑問符をつけずに答えた僕に〝そいつ〟は困ったような笑みを浮かべて僕の頭を撫でる。
元々他人に触られるのは好きじゃないから手を払いのけようとしたけど何故かそんな気持ちは徐々になくなっていった。
〝そいつ〟はシスターに許可をもらうと、僕を孤児院から連れ出した。
「ちょっと、どこに……」
「秘密の場所です、迷子にならないでくださいね？」
手を繋いでいるのに、迷子になんてなるわけないだろう。
〝そいつ〟は僕の手を握ったまま、孤児院から15分程歩いた辺りの一軒家の前でぴたりと足を止めた。
今度は何だ、と見つめていると僕の方を振り返って言った。
「将来は、ここに住もうね」
「……は？」
「私は一足先にホグワーツへ通うのでしばらく会えなくなりますが、トムはここへ自由に来ていいですよ」
「何？ホグワーツって」
「ここなら鬱陶しい視線も何も理解しようとしない愚かな人間（マグル）も来れませんから。今のトムには天国でしょう？必要なものも用意しておいたので好きに過ごしていいですよ」
「マグ？何？何を言ってるの。好きにって、家なんてどうやって」
「どうやって、って勿論、ちょっとお願いしただけですよ？」
「そんな簡単に……」
その時ハッと我に返って〝そいつ〟の顔を見上げる。
自分と同じなその瞳が、妖しく輝いてるのを見て背筋がゾッとした。
自分と同じ『はず』の血が繋がっている〝そいつ〟の存在が急に恐ろしく思えて、その場から逃げ出したいと思えるくらいに、僕は恐怖していた。
「トム？」

「……どうやって、お願いしたの」
急に黙り込んだ僕の様子が気になったのか、〝そいつ〟は僕の顔を覗き込むが、絞り出すようにしてようやく言葉を吐き出すと、事も無げに〝そいつ〟は答える。
「手段ってそこまで大事ですか？結果がすべてでしょう？今、私とトムがいれる場所が此処にある、それだけでいいじゃないですか」
「……っ、」
「それに、手段がどういうものか、トムは気付いているでしょう？」
「そんな、こと……」
そんなことを言い出した〝そいつ〟に否定の言葉を返すと、心底不思議そうな顔をしてから微笑んで、爆弾を落とした。
「魔法、使えますよね？」
「っ……！」
しまった、こんな分かりやすく動揺を表に出すなんて……！
「トム、私は貴方の血の繋がった姉弟。それなら私も魔法が使える。……当たり前のことでしょう？」
聖女のような笑顔を浮かべた〝そいつ〟は僕の両手を自分の手で包み込んでそう言った。
「貴方は孤独じゃないの。これからは私がそばにいるわ」
あぁ、なんて甘い毒なんだろう。
この女は、この〝姉〟は。
「……ねぇ、さん」
「トム、トム……私の弟、愛しい弟」
そっと僕の額にキスをするジルからは甘い香りが漂い、鼻をかすめた。

己のため

「それじゃあ、手に入れた禁書はいつものところに。ええ、ありがとう」

微笑を浮かべたジルは院から与えられている自分の部屋の窓辺にいる小鳥にお礼を言うと、それに答えるようにチチッと鳴いて、その小ささに見合った素早さで夜の闇の中へと消えていった。

使い魔の類である小鳥はある程度の距離ならば術者との意思疎通も出来るし、重いものでも運べるのである界隈の魔法使いの間では必須の存在となっていた。

そんな小鳥が持ってきたのは一冊の本。

多くの人の手に渡ってきたのか、薄汚れて痛んだカバー、背表紙には『古きモノの蒐集物』とこれまた古めかしい字体で書かれたその本は、見る者が見れば喉から手が出るほど欲しがるくらいの貴重な禁書だった。

闇の魔術然り闇の生物に関する記述も多く、今のジルが求めるものが詰め込まれていた。

ジルはそっとその本を手に取り、表紙をめくる。

最初の数ページは目次だった。

〝黄金律の人間〟、〝金の林檎〟、〝慈母の涙〟、〝血の呪い〟、〝毒の聖杯〟、〝鵺の尻尾〟……。

ジルはある項目でページをなぞる手を止めた。

〝蛇王の眼〟

バジリスクと呼ばれる巨大な蛇が持つ眼は見たものを即死させるといわれている。

太古の昔から永い時を生きる幻の生物だ。

「蛇王の眼、か。多分だけれどこの〝眼〟も同じ類のものよね？」

そっと自分の赤い瞳を片手で覆う。

前世の記憶を取り戻してからはっきりと自覚した自分の力。

相手の目をじっと見つめることで発揮される〝魅了の魔眼〟。不確定な推測ではあるが、今まで手に入れてきた古書には記載されていない、恐らく魔法族が持ち得ないものか、もしくはどちらかといえば吸血鬼やサキュバスが持つ異能の類だ。

異性を虜にし、自分の意のままに操る。

そんな能力を何故、魔法使いといえど人間の範疇である自分が持っているのか。

そもそも、『原作』には有り得なかった〝トム・リドルの姉〟として存在する自分にその『何故』が通じるのかも怪しい。

存在自体がイレギュラーなジルが全てに対して『何故』と疑問を感じてしまうのは当たり前だろう。

蛇王の眼の項目に記された行を指でなぞりながら読み進めると、後半の記述は蛇王の眼についてではなく、魔眼そのものについてが述べられていた。

『魔眼とは、眼球（もしくは眼球に当たる部位）に力を宿した状態のことを指す。術をかける際は悪意を持って相手の目を見つめることで効果を発揮する。効果は様々であり、ただ単に呪いをかけるものから相手を魅了状態にするものや未来視ができるものまで、その効果は多岐にわたる。

魔眼の効力は対生物の場合、多くは直接相手の目を見る必要があり、間接的に見た場合は効果は著しく低下する。

また、魔眼が効果を発揮する条件として魔眼の効果が特殊なものでない限り『相手の目が見えること』が必須であると言える。その際、魔眼保持者の力量によって相手の目を見るという条件が両目であるか、片目であるかが左右されるようだ。

現時点で魔眼を発現する条件は明らかにはなっていない。

魔法族では強大な力を持った魔女にのみ発現する。また異種族でも最上位の者のみが保持しているようで最上位者が死亡した際は消失もしくは継承されるという現象が確認されている。

魔眼を持つ者は短命の傾向にある。それが人に過ぎた力を持った代償なのだろうか。』

〝短命〟。
その単語が嫌に目に付いた。
ジルの目的は〝セブルス・スネイプ〟に会うこと。
それも闇の時代を、赦されぬ咎を一身に背負い、命を賭して生き残った男の子を守り続けた影の英雄である彼に、なのだ。
今まで幾度か魔眼を使用したが、特に体の異変は感じていない。
いつそれが起こるのかも分らないが、それでも使わないという選択肢はジルの中には無かった。
どんな手段を使っても生き長らえるのだ。そう決意したジルの瞳には確かな決意の炎が宿っていた。

セブルス・スネイプの最愛の人を殺した人間の顔が思い浮かぶ。
今はまだ違うが、これから数年後あの男はサラザール・スリザリンが遺した秘密の部屋を開けて、バジリスクを使って最初の殺人を犯す。
人当たりもよく、成績優秀なスリザリンの監督生を務めたサラザール・スリザリンの末裔、トム・マールヴォロ・リドル。

「……トム」
私の弟。自分の知る未来にジル(わたし)は存在しない。だから自分の知る未来にするためには本当ならトムの前に姿を現してはいけなかった。
けれどあの日、トムに会う数日前に堪らなくなって孤児院に行ってしまった。
そこで見た、孤独と憎悪に燃える瞳を見てしまってから、どうにかしなくては、と思ってしまったのだ。

前世の記憶を取り戻し、この世界の未来を知って一人前に達観したつもりでいたが、やはり精神が体の方に引っ張られているのか、もしくは唯一の肉親として情を持ってしまったのか。
トムは賢い。僅かな情報から最適解を導いてしまう。

だからホグワーツに行くまでの間、自分の計画や前世の記憶について如何なる事も悟られないようにしなくては。
「……憂いの篩を手に入れなきゃ」
自らの記憶をトムに、否、誰に見られても困らないよう。
『これから』を忘れないよう。
未来のヴォルデモートにとっても、ダンブルドアにとってもこの記憶は重要なものに成り得るのだから。
そう思ってから、先ほどの使い魔である小鳥にそれを伝えておけばよかったことに思い至り、小さくため息をついた。
「これから長い道のりになるわね……。でも、」

――私は〝貴方〟に逢いたい。

そんな言葉を口にすることなく、ジルはそっと窓の外の月を見上げた。
恋焦がれる乙女のような、純粋な想いから溢れた言葉ではない。
自分が、〝　未来の教授〟に会いたい、ただそれだけのために、これから救えるはずの数多くの魔法使い達の命を見捨てるのだ。
赦されるはずはない。……赦されたくもない、赦されなくてもいいのだ。
我儘（エゴ）の塊だと、自覚はしている。
〝百合〟と出会ってもいない、まだ生まれてきてもいない彼に会いたいが為に。
「……『ごめんなさい』。……なんて、懺悔をするにはまだ早いわね」
日本語で紡がれた謝罪の言葉を打ち消すようにジルは首を振って自嘲気味に呟く。
けれどジルは何もしない。
救える命があろうと、助けを求められようと、自らが傷つけられようと。
約２０年後にはトムが闇の勢力を率いてマグルやマグル出身の魔

法使いを狩り始める。
闇の時代が始まるのだ。

ジルは手元の本へと視線を落とす。
禁書指定されているこの本には興味深い記述ばかりだ。
いずれ訪れる闇の時代。
けれどもそれより先に来るのは自分のホグワーツでの寮生活だ。
恐らくスリザリンへ入ることになるだろう自分の未来の為に今はただ知識を頭につめこむだけだ。
いまだ根強く残るマグル生まれを忌避する差別的文化。それはスリザリンに在籍することになれば否応なくこの身に降りかかるはず。そうなったとしても侮られないための知識を、力を、技術を少しでも身につけなくては。
ジルは部屋の明かりを消してベッドサイドのランプに明かりをつける。今にも千切れそうなページを丁寧に捲り、最初のページからゆっくりと読み進める。
巡り巡ってジルの手にやって来た古い古い禁書。
その著者を示す欄には小さく〝S．S．〟とだけ刻まれていた。

規格外

「ジル、お客様がお見えですよ」
シスターが私室まで来て、そう告げた。
ついにこの時が来たか、とジルは待ち侘びた人物がシスターの後ろから現れるのを待った。
「Ｍｒ．ダンブルドア、この子がジルですわ。それでは私はこれで」
言葉少なにジルを紹介するとシスターはそそくさとその場を立ち去った。
関わりたくないという本音が透けて見える様子に老人は僅かに眉を顰めたがすぐに部屋の中にいる少女に向かってダンブルドア、と呼ばれた老人は好々爺らしく笑みを浮かべる。
ダンブルドアが挨拶しようと口を開いた瞬間に、少女はソレを遮って頭を下げた。
「初めまして、Ｍｒ．ダンブルドア。私はジル・マールヴォロ・リドルと申します。ご用件はホグワーツ魔法学校の入学について、ですよね？」
「いかにも。わしはアルバス・ダンブルドアじゃ。Ｍｓ．リドルはホグワーツのことを知っておったのかね？」
「私は弟と違って両親の記憶がありますから」
はいともいいえとも取られないような返事をにっこりと笑ったジルにダンブルドアは愉快そうに特徴的な笑い声を上げるとローブの懐から一通の手紙を差し出した。
それを受け取ったジルはさっと目を通すと、どうやら入学承諾書のようで、そこで自分が孤児院出身故にふくろう便での返事が出来なかったため同封されていた承諾書を返送していなかったことに思い至る。
「……すみません、お手数おかけしました。入学させていただきますわ」

「それは何よりじゃ、ホグワーツは君を歓迎するじゃろう。ところで、君の弟はどうするのかな？別の孤児院にいるとはいえ、全く疎遠というわけでもないのじゃろう？」
「多少心配ではありますが、トムなら大丈夫です。私がお世話になっていた人を紹介する予定ですし、何よりあの子は賢いですから」
　さらさらと承諾書に自分のサインを記入して、もう一度承諾書に目を通し疑問がないか確認しているジルへ在学中の弟について尋ねるダンブルドア。老獪な人物相手に顔色一つ変えずにジルは笑顔でい続けた。
「君がそう言うなら任せよう。……では、入学には同意ということで校長に伝えておこうかの。Ｍｓ．リドル、入学用品の買出しもあるがそちらはどうかね？」
「そちらも心配いりませんわ。ダイアゴン横丁に詳しい方を知ってますので。お気遣い、ありがとうございます」
「爺の余計な心配じゃったな、ふぉっふぉっふぉ」
　ダンブルドアはそれからいくつかジルに質問をした後、入学承諾書を持って孤児院を去って行った。

　対してジルは、というと。
　ダンブルドアが去ってから詰めていた息を吐き出した。それは安堵から来るもので、存外自分はあの魔法使いと相対することに緊張していたようだと今更ながらに気付いたのだった。
　笑顔と遠まわしな言葉に隠された真意。
　ダンブルドアは恐らくジルの異常さに気付いていたのだろう。
　事実、あの好々爺めいた笑みの裏で隠れて自分に開心術を仕掛けてきていたのだから。
　気付いてない振りをしていたがジルはジルでしっかりと閉心術を使って防いでいた。
　ダンブルドアはジルの心を覗けなかったばかりか、逆に自分が開心術をかけられているとは露にも思わず、ジルを孤児院にいる子供、ということで感情を隠すことに慣れている解釈したようだが。

魔法族の両親を持って、かつ両親から教えてられていたとはいえ、本来１１歳の子供が大人しく理知的に会話が出来るのもなかなか難しいことなのだ。
しかもその相手が見知らぬ他人。それに子供とはいえ、魔力を持つ者なら誰もが持っている魔力感知、マグル的に言えば第六感だろうか。
ダンブルドアの膨大ともいえる魔力の大きさに気付かないはずが無い。
いるとすればダンブルドアをも上回る魔力の持ち主くらいだろう。
そのことを古書や禁書から知識を得ていたジルは、ダンブルドアの実力を知るため、また自身に内包される魔力量を知りたかった。
結果、ジルは強大な力を前にした時に感じるであろう〝怖れ〟を期待していたのだが、それもなく。むしろあっさりと心を覗けてしまい拍子抜けしてしたのもまた事実だった。
未来のヴォルデモート卿が恐れていた人物はこんなものだったのかと、僅かな落胆もあった。それと同時に、アルバス・ダンブルドアの最大の脅威は魔法だけではなく、如何なる時でも感情を切り離し、どんな物でも使う冷酷な策士であるということだ。
「9月からホグワーツ……気を抜き過ぎないように気をつけないといけないわね」
ダンブルドアがまだ校長ではない今、教師という身近な立場にある老人による監視の目があると考えた方がいいだろう。
それに、純血主義の生徒が多いスリザリンでは半純血とはいえ、マグル出身とほぼ変わらない自分がどういう立ち位置にされるのかも気がかりだ。
まぁ、どちらにせよ、確実にスリザリンになるであろう自分の未来を思い浮かべてジルはまだ見ぬ同寮との生活にため息をつくのであった。

従者は恐れない

ルイス・タチアナはノクターン横丁に店を構える老年の男だ。
ホワイトなものからブラックなものまで何でも取り扱う一種の質屋のような仕事をしており、その界隈では名が通っているほどの手腕を振るっていた。
鷹のように鋭い目、日に当たったことがあるのか疑問に思うほど不健康な白い肌。
まともな食事をとっていないような痩せぎすで長身。
見る者が見れば、その男がルイス・タチアナであることは一目瞭然だった。
また、闇の魔術に関係するものを扱うからか、魔道具の扱いや観察眼にも優れており、戦闘に関してもかなり腕が立つためノクターン横丁にいるならず者の中では手を出すべからずと通告が出ていた。
そんなルイスが今日は珍しく店を閉めて新しく入荷する商品を探すためにノクターン横丁の更に奥にある通称〝暗黒街〟とも呼ばれるところへと足を伸ばしていると。
ふと、嗅いだことの無い甘い香りが鼻をついた。
咄嗟にローブの袖で鼻と口周りを覆い、辺りを見回すが人気が無いのはいつものことだが、些か今日は静か過ぎるような……？
「……静か過ぎる。魔法薬でも嗅いだことのない匂い。一体何が……」
「判断が早いのですね」
「!!」
外見からは想像つかないほどの素早い身動きで振り返ったタチアナは声の主を目にした途端驚きに目を瞠った。
「――〝Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ〟」
「〝Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ〟？」
ルイスの口から零れた言葉を少女は繰り返した。
〝Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ〟。

それはタチアナの家に代々当主に口伝でのみ伝えられる伝説に出てくる存在を指す言葉だった。
はっと我に返ったルイスは警戒しつつも少女へ笑みを向けた。
「お嬢さん（フロイライン）、私に何用かな？」
少女はその言葉に笑みを返して、着ていたワンピースの裾を持ってゆっくりとカーテシーをした。
なかなか様になっている振る舞いにタチアナは少女をどこぞの貴族の娘かとも思ったがそのワンピース自体の質はどちらかと言えばその逆である。
貴族にしろ、平民にしろ、ノクターン横丁の最奥には相応しくない装いであるのは確かだ。
「初めまして、ルイス・タチアナ様。私、ジル・マールヴォロ・リドルと申します。以後お見知りおきを」
「……私の名前を知っていたのかね？」
「ええ、スリザリンの従者の末裔である貴方様を知らない方がおかしいでしょう？」
「！それをどこで知ったのかね？場合によっては……」
そっと懐にしまってある杖に手を伸ばす。
少女の思わぬ爆弾発言にタチアナは警戒心を一層強くして、更に油断を捨てた。
見た目は年端もいかぬ少女でも、タチアナ家に伝わる秘密を知っているということは侮ってはならない何よりの証拠だったのだ。
「物騒ですねぇ。知っていますわ、だって私がサラザール・スリザリンの末裔ですもの」
「は、」
何を、と思う。
目の前にいるこの少女がサラザール・スリザリンの末裔？
何の悪い冗談だ、と吐き出しそうになるがそれと同時に納得もしていた。
少女を見た瞬間にこぼれた言葉、”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”が何よりの確信に至るものでもあった。己に流れる血が、少女を自分の主で

あると知らしめていたのだ。
”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”とは、タチアナ家に伝わる言葉だ。
タチアナ家の始まりはおよそ千二百年ほど前になる。
古くから存在するタチアナ家は代々歴史に名を残す者の従者となることが多く、タチアナが選んだ者に英雄の素質ありと言われることもあったほどだ。
陰の立役者とされてきた歴史の中でもタチアナの名を有名にさせたのはホグワーツ創設者の一人サラザール・スリザリンの従者となったエドワード・タチアナだろう。
タチアナ家十代目当主エドワード・タチアナはタチアナ家でも類を見るほどの才能の持ち主だった。幼い頃より自在に魔法を使って見せ、九代目当主から受け継げるだけの全てを二十にも満たない内に修め、更に賢く、観察眼に長けた人格者だった。
サラザール・スリザリンが他の創設者と教育方針の違いでホグワーツを去ることになり、エドワードも共に姿を消した。
当時すでに結婚し、後継もいたエドワードは従者として一生を費やしたと伝えられている。
そして主人だったサラザール・スリザリンが何らかの原因で亡くなった後はタチアナ家に戻ったが、後を追うようにひっそりと死んだらしい。今際の際にこう言い残した。

――――『”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”、我が主。もうすぐ、貴方のお側に』

最期まで従者としての姿勢を見せたエドワード。それが相応しいと思える主に出会えたエドワードはタチアナ家でも至高の幸福を得た当主として伝えられている。
また、最期の言葉、”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”は『最高の主人』または『己が仕える至高の存在』『唯一の主』を指して使われるようになった。
それからタチアナ家の当主は”Ｄｅａｒ（最高）Ｍｏｎｔｅ（の主人）”と出会っ

てきた。
現当主ルイス・タチアナの父、アルカド・タチアナの主もまたサラザール・スリザリンの子孫ではないものの”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”に出会い、その言葉を遺して逝った。
父親の最期を看取ったルイスは父親が心底羨ましかった。
”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”に出会えたことも、満足そうな穏やかな笑みを見せて逝ったことも。
ルイスは”Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ”を心から求めていた。
影の一族であるタチアナ家が隠れ蓑として始めた店もルイスの元々の手腕もあり、すぐに軌道に乗った。
時折タチアナ家の噂を聞き、従者としてスカウトしに来る貴族もいたが頑として首を縦に振らなかった。それはひとえに自らの主足り得る存在であると、従者として生きたタチアナ家の血が、そして何より己の心が納得しなかったからである。

「君が、サラザール・スリザリンの末裔……？」
「はい。証拠はありませんが、確かですよ」
「いえ、証拠はあります。《貴女はパーセルマウスですか？》」
蛇語で語りかければ、少女は一瞬驚きに目を瞠るが、すぐに花のような笑顔で返す。
「《ええ、もちろん》」
少女、もといジルの返事にルイスは深々と頭を下げた後、ジルの足元に跪く。
落ち着いた様子のルイスだが、実際内心は歓喜に満ち溢れていた。
――漸く、漸く巡り合えたのだ!!〝Ｄｅａｒ　Ｍｏｎｔｅ〟！私だけの主！
「ジル様、どうか私を貴女の従者として仕えさせていただけないでしょうか」
「……貴方にどれほどの覚悟があるのかしら？正直に言うとサラザール・スリザリンの末裔は私だけではないの。弟がいるし、性格だけで

判断するなら私より弟の方がスリザリンの資質があると思ってる。それに私は私の目的のためだけに動いている。そしてそれはおいそれと他人に話せる内容ではないわ」
「……何をお求めでしょうか」
「すべてよ。貴方の体、心、そのすべてを捧げなさい」
「求められるまでもなく」
「では構わないわね？」
「はい」
ルイスは跪いたまま恭しく己の杖をジルへと差し出す。
ルイスが持つ杖は二本あり、一本は使用者個人に合った杖であり、もう一本は代々タチアナ家当主に受け継がれるものとある。
タチアナ家当主が持つ杖は当主とその主人に従順で大人しい杖だ。ツゲの木を使い、芯には屋敷しもべ妖精の骨が使われている。
ルイスが差し出したのはタチアナ家で受け継がれる杖だ。
見るからにまだホグワーツに通う前のジルのためにルイスはその杖を渡したのだ。
ルイスの読み通り、ジルはまだ杖を持っていない。そしてルイスが個人で使っている杖を渡せば杖の忠誠心はルイスにあるため本来の魔法の効果が弱まってしまう。それを良しとしなかった、ジルにどんな魔法をかけられても抵抗しないという紛れもないルイスの意思だった。
ジルは杖を受け取るとその忠誠心が己にも向いていることを感じ取り、僅かに口角を上げた。
ルイスは自分に向けられる杖を臆することなく見つめ、そして。
「《開心せよ（レジリメンス）！》」

思案する

忠実な手足とも成り得る存在を手に入れたジルはまず自身の生活環境の改善から手をつけた。

ルイスに孤児院近くの一軒家を購入してもらい、さらに防犯として強力な模倣をかけ、秘密の守り人としての役割をルイスに与えた。

そして家具やら何やらを揃え終わると今度は自身の知識を増やすことにした。

元々ルイスの趣味が魔道具集めや禁書集めだったこともあり、まずはその蔵書を借りて読み始めた。

まずは簡単なホグワーツでも教科書として使われるような物から始め、元々サラザール・スリザリンの血筋ということもあってか覚えることは苦にならず、しかもルイスという優秀な魔法使いが側にいたこともあり驚異的な早さでジルは魔法を修めていった。

「――これで大体ホグワーツで習うおよその技術は終わったかと」

「そう……でも案外簡単ね。難があったのは守護霊の呪文と魔法薬学かしら」

「それは仕方ないでしょう。ジル様がいくら特異な方とはいえ、まだ十年しか、それも孤児院でお過ごしなされているのですから。魔法薬学に関してはかかりきりにならなければ完成しない物も多々ありますゆえ。難ありと申されてもフェリックス・フェリシスくらいでしたし」

「そうねぇ。まぁこれからまだまだ時間はあるし、大丈夫ね。……そうだ、ルイス」

「何でしょうか」

「貴方、もっと生きたい？」

「……どういう意味でしょうか？」

主の意図がつかめず申し訳なさそうに聞き返すルイス。こっそりとほくそ笑むジルは悪戯が成功した子供のように声を弾ませて言った。

「いえ、ね。ゆくゆくは若返りの魔法か薬を開発しようと思ってて。私は今の状態、というかある一定のラインで老化を止めておきたいのよ。そうなると私よりだいぶ年上の貴方は先に死ぬことになるでしょう？だから実験も兼ねて若返ってくれないかなって思って聞いたの」

ジルの言葉を段々と理解したルイスは喜色満面で肯定の意を返した。

自らの人生を悔いた事はないが唯一懸念があるとすればジルのそばにいられる時間が少ないことだった。

このままいけばジルが三十を迎える前に寿命か病気か事故かはわからないが死ぬことは確実だった自分の残りの時間。それをジルは、暗にもっと己の側にいろと言ってくれたのだ！喜ばない方がおかしいだろう、とルイスは内心で思う。

従者として、またある時には教師として共に過ごしたジルに、求められるということはタチアナ家に生まれたルイスにとって至上の喜びとなった。

「ジル様、このルイス一層の忠誠を誓います」

跪いてそう言うルイスにジルは苦笑を浮かべる。

従者として仕えることになったあの日から二ヶ月ほど経つが、ルイスの忠誠心が高ぶる度に忠誠の儀（ルイスがそう言っていた）はもう両手では足りないほど繰り返されている。

満足したルイスは立ち上がるとジルのお気に入りの紅茶を淹れ始める。

「美味しい」

「ありがとうございます」

猫舌で熱いものがあまり好きではないジルに合わせて少し温めに、そして紅茶も甘い方が好きなジルのためにフルーティーな茶葉を厳選して淹れられた紅茶は飲むだけでほっと息を吐いてリラックスできるほど体に染み込んだ。

短期間でジルの好みを把握したルイスも従者としての腕を磨き続けてきた甲斐があったものだろう。

「ところで、ジル様は弟君はお会いにならないのですか？」
「そうね……悩みどころではあるの。私が知る道筋には私はいないから、私がトムに会ってどう変化するかも怖いのよねぇ」
「そうでしたか……。情報によると孤児院の経営が行き詰っているようで、近々経営縮小が成されるようです。今までも子供たちは満足できるような生活ではなかったのでさらに困窮するかと思いますので、私の方で援助してもよろしいでしょうか？」
「それくらいなら構わないわ。私がいる方は気にしなくて良いわ、今年中にはダンブルドアが来るでしょうし、まだ怪しまれたくはないから」
「承知致しました」
従者どころか貴族や王族で言う暗部の様な働きまでするルイスに、良い駒を手に入れたとジルは上機嫌だった。
ホグワーツでは困らない程度の知識は手に入れたが、それだけではまだ足りない。
ジルの目下の目標は若返りの魔法か魔法薬を作ることだ。
未来では例の赤毛の双子が老け薬なるものを作っていたが、ホグワーツ在学中に作れるくらいのものなのでジルにも作れるだろう。故に目指すのは更に先、完全な若返りなのだ。
「まぁ正直なところ、貴方は若返りである必要があるけど私は老化が止まれば問題ないのよね。薬なり魔法なりが出来るのはまだ先でしょうし、考えておいてくれる？」
「返事は決まっているも同然ですが……、かしこまりました」
よくよく考えれば、魔法や薬に拘る必要も無いのだが、まぁそこは追々考えればいいかと頭の隅に投げやった。
可愛らしい砂糖菓子をつまみながらジルは別のことを思案する。
先ほどルイスから振られたトムのことだ。
ルイスにも言った通り、自分が知る未来にはトムの姉（ジル）という存在はない。
どうしたものか……。
「いっそのことオブリビエイトでもかけてしまおうかしら……」

ぽつりと呟いた言葉にルイスはあえて反応しなかった。
ジルがルイスに求めているのならそう声をかけるし、今は反応することを求めていないと判断したからだ。
「……ままならないものねぇ」
出来るならば物語の強制力とやらに期待したいものだ。
今度、会いに行ってみようかしら。
もし道筋が変わってしまうようならば、消してしまおう。
ジルはおいしい紅茶を一口飲み、薔薇の形をした砂糖菓子をつまんでそう決意した。

様子見と再会まで

あれから結局、ジルは『最悪忘却術をかければいいや』と決めてトムに会いに行くことにした。

最初は陰からこっそりと様子を伺っていたのだが、よくよく見ていると他の子供がトムに悪質な悪戯を繰り返しており、またその本人もやられたら倍返しとばかりに魔法を使って仕返しをしていた。

やっぱりそこは原作通りなのね、とは思った。ただ些かあいての子供が可哀想なのは否定できない。何しろトムは原作でもチート級なのだ。

たとえ子供であってまだ魔力の扱いに慣れていないとはいえ魔法は魔法。

ただの子供と魔法使いの子供とではハンデに差がありすぎる。

かといって相手の子供もトムにちょっかいをかけているのでどっこいどっこいなのだが。（嫌なら構わなければいいという思考）

「それでもあちらは気に食わないんだけれども」

ちらりと見遣った先には施設の従業員が数人、嫌悪感に満ちた視線でトムを見つめて、否、睨んでいた。

大方面倒ごとばかり起こす上に得体の知れない力を使うトムを疎ましく思ってのことだろう。嫌がらせでもしてやり返されたから手を出すに出せないといった状況なのかもしれない。

「随分とまぁ、早い段階から敵を作りますねぇ」

それが未来の彼の業でもあるのだろうか。

そしてそれは私の業にも成り得る。

「それにしても気に食わない」

一人、訥々と喋っていたジルの明確な敵意が大人に向けられる。

ルイスを相手に魔法を使った戦闘をしていたジルは十歳にして一端の闇祓いと遜色ない程度には戦闘慣れしていた。

それでも理性では抑えているためか、殺気向けられた本人たちはぞわりと寒気を感じて両腕を擦る程度で終わっている。

「仕方ありませんね」
ジルはそう言ってため息をつくと、孤児院の入り口へ向かう。
受付では女性が一人、淡々と事務作業をしていたがジルに気付くとめんどくさそうに応対を始めた。
「お嬢ちゃん、此処に何の用かしら？」
「いえ、ちょっと知り合いに会いに来たんです」
じっと意識して女性の瞳を見る。
「……そうなの？名前はなんていう子なの？」
「トム、トム・リドルです」
「え……、あの子の知り合いなの？」
ジルの顔を見て顔を赤らめていた女性は表情を一変させると嫌悪を浮かべて「やめといた方がいいけど……」と声を潜めて忠告してくる。
ジルは何故？という意味をこめて首を傾げると女性は辺りを見回して誰もいないことを確認してからジルの耳元に顔を寄せて言った。
「呪われるんだって」
「呪われる？」
「ええ、その子に関わると物が無くなったり壊れたり、小さい怪我から大きい怪我までいろんな人が酷い目に遭ってるわ。だから会うのはやめといた方がいいと思うのだけれど……」
気まずそうに、けれど心配しているの様子を見せる女性にジルはにっこりと笑って返した。
「お前如きが私の弟を語るな、虫けらが」
「っ……」
底冷えする冷たい瞳に見据えられ、ぞくりと背筋が粟立つ。
「なぁんてね。でも、あまりおいたが過ぎると本当に呪われてしまうかもしれないですよ？なんたってあの子の姉ですから」
鈴を転がすような笑い声を上げてジルは女性を見る。
「私が言ってる意味、わかりますよね？」
顔を強張らせた女性は言葉も出ないのか、ジルの言葉に同意する様にひたすら首を立てに振る。

その反応に満足したのかジルはにっこりと笑ってそのまま受付を素通りして行った。

残された女性の顔には恐怖を感じたはずなのにどこか恍惚とした感情が見え隠れしていた。

ホグワーツ特急にて

9月1日、キングズ・クロス駅。
混雑を嫌ったジルは汽車の発車時間よりだいぶ早めに駅に到着していた。
ちらほらと見える人影はどうやらジルと同じく人ごみに巻き込まれないために早めにやって来たホグワーツ生が多く、中でもスリザリンの生徒が大半のように見えた。
考えることは同じのようだ、とジルは検知不可能拡張呪文のかかったトランクを手に汽車へと乗り込む。
やはりスリザリンはその他の三寮とは相容れないようで、スリザリンは監督生のコンパートメントを除き、前の方の車両はスリザリンで埋まっていた。
ジルはゆっくりとコンパートメントの中を覗きつつ、プラチナブロンドの生徒を探した。
ジルの知っている知識、そして一族の性格の系統から言って間違いなく早めに来ているはず、と当たりをつけていたのだ。
そしていくつかのコンパートメントを覗いた後、見つけたのはプラチナブロンドに鋭利な蒼い瞳、整った顔の男子生徒。すでにスリザリンの制服に着替えている彼を見つけたジルはこっそりと笑みを浮かべる。
コンコン、と控えめにノックをして中から返事が来るのを待つ。
すぐにどこか面倒さを含んだ声色で「入れ」と聞こえてきた。
「失礼いたします」
「どこの家の者だ」
「ジル・マールヴォロ・リドルと申します。今年入学することになりましたのでご挨拶に」
「……聞いたことがないが。純血か？」
「まだ無名の家ですので。半純血ですが、代々スリザリンの出身ですからアブラクサス様のご期待には沿えるかと」

「ほぉ」
にこやかに受け答えするジルを見定めるように見つめる少年は感心した。
まだ、ということはこれから名を上げていくつもりがあると、そしてそれはよくある口だけではないということを自身の直感が告げていた。
「俺の名前はアブラクサス・マルフォイだ。Ｍｓ．リドル、よろしく」
「ご随意に、閣下」
綺麗なカーテシーをしてジルはコンパートメントを後にした。
とりあえずの接触はうまくいったようだ。
今回ジルは今までのように魔眼を使わなかった。
Ｓ．Ｓ――――サラザール・スリザリンの遺した著書にあった魔眼の保持者は短命というのを気にしたからという理由もあったが、相手が何よりあのマルフォイ家の嫡男であり、未来の死喰い人仲間であることも関係しており、トムが入学するのは来年で、まだ時間も機会もあるが出来るならアブラクサスにはなるべく自然な状態でいてもらわなくて困るという判断からだった。
アブラクサスのいたコンパートメントから三つほど離れた場所に空いたコンパートメントを見つけて中へ入る。
「あれがアブラクサス・マルフォイ。トムを見出す男、トムの後ろ盾、ね」
見たところ、スリザリンらしさを兼ね備えた男だった。
そして、人を見る目と直感も優れていた。
開心術とはまた違った、相手の感情を読むことに長けた血族、その才能を最も受け継いだ男。
それがジルのアブラクサスに対する評価だった。
アブラクサスの息子　ルシウス、それにアブラクサスから見て孫に当たるドラコは現時点、書籍からの知識ではただ誇るものが血筋しかないお坊ちゃんたちだ。
それもまた、本人が生まれ、かかわりを持てば変わるのだろう。
ジルはそっと未来へ思い馳せる。

彼の人へと。これから辿るであろう自らの道へと。

ジルが去ったコンパートメントで、アブラクサスは一人愉快に笑みを深めていた。
今年もまた一人、優秀で美しさを持ったスリザリン生が入学したことに喜びを感じていた。
そしてふと、先ほど挨拶に来た女子生徒が思い浮かぶ。
ジルほどの美しさではないが、彼女もまた整った見た目とスリザリンに相応しい思想を持っていた。
「……面白い」
ヴァルヴルガ・ブラック。
ジル・リドル。
四年後には親戚筋のオリオンが入学してくる。
それ以外にも、出来るなら優秀な純血が入ってくれれば尚良い。
そう呟き、窓の外へと目を遣る。
これから訪れるであろう愉快な日々が楽しみでしょうがなかった。

組み分け

「一年生はこっちに！迷子にならないように着いてきなさい！」
引率約の教員が拡声呪文を使って呼びかけをしていた。
ジルは荷物を預けると指示に従い、教員についていくと期待に目を輝かせている新入生が多く、中にはきょろきょろと周囲をせわしなく見ている者もおり、やはり時代は違えどホグワーツに入学するということは多くの者にとって喜ぶべきことなのだろう。
湖でボートに乗り、ゆっくりとホグワーツへ向かっていく。
ホグワーツを照らす明りが湖面に反射してキラキラと輝いていた。
――ここが、始まりと終わりの場所。
「（上手く、やらなければ……）」
少しでも物語を良い方へ、無理だとしても彼の為になる方へ。
究極の我儘（エゴ）、自分が望む未来の為に。

ホグワーツ城はジルの記憶にあるよりか幾分かだけ、綺麗に思えた。
実際見たのは未来のものであるし、前世の記憶で言えば５０年ほど昔に当たるのだから不思議ではない。
大広間では新入生に笑いかける在校生たち。
どの子が自寮に来るのか、楽しみなのだろう。
「静かに！これより新入生の組み分けを行います。名前を呼ばれたら前に出てきなさい。私語は厳禁ですよ」
教員が順に名前を呼び上げていく。
記念すべき最初の寮はハッフルパフのようだ。歓声が上がり、新入生の男の子は嬉しそうに寮の先輩方が待つテーブルへ駆けていく。
「リドル・ジル！」
そうこうしている間についにジルの名前が呼ばれ、ジルはゆっくりと階段を上って前に出る。

用意されていた小さな丸椅子に座るとそっと組み分け帽子が被せられた。
『おや……、君は……』
「(初めまして、組み分け帽子さん)」
『君の答えは決まっているようだが、一応聞いておこう。どの寮に入りたいかね?』
「(勿論、スリザリンよ)」
『いいのかい?君がグリフィンドールへ行けば間違いなく英雄として名を残せる』
「(英雄として名を残すよりもやりたい事があるの。それに、今の私にはスリザリンがちょうどいいわ)」
『君がやろうとしていることは間違いなく修羅の道になる。が、スリザリンで君は真の友と揺るぎのない真実を得る。いいだろう、ならば……「スリザリン!」』

わぁ、と一際大きな歓声がスリザリンから上がり、数人の上級生が手招きをしている。
自分のスピードで歩いてテーブルに向かう。
こっち、と手招きされた方へ向かい、腰掛けると目の前には特急で挨拶をしたアブラクサスがいた。
「さっきぶりだな、Ｍｓ，リドル」
「えぇ、宜しくお願い致します。マルフォイ先輩」
「アブラクサスでいい」
「ありがとうございます。では私のことはジルとお呼びください」
アブラクサスとジルの会話が聞こえた周囲の生徒は驚きに目を瞠っていた。
マルフォイ家の跡取りであるアブラクサスと新入生のジルが知り合いだったということもそうだが、あのアブラクサスが自分を名前で呼ぶことを許可したからだ。
ホグワーツでは基本的に先輩後輩の垣根自体が低い。だが、それはスリザリンを除くほかの三寮に限っての話だ。

純血貴族が多く、中でもマグル生まれはカーストの最底辺にいるといっても過言ではない寮内では年齢ではなく家格が物を言う。権力であったり財力であったり、スリザリンにおいてはどれだけ純血家系が続いているか、そしてどれだけ魔法省や関係各所に影響力があるかというもので家格が決まる。

つまり、純血貴族のその筆頭ともいえるマルフォイ家、そしてその嫡男という立場にあるアブラクサスはスリザリンの中で最上位に君臨する男なのだ。

そのアブラクサスがマルフォイではなくアブラクサスと呼ぶことを許可した。

それだけの価値がジルにはあると言っているようなものだったのだ。

スリザリンでは一つの言動や行動が与える影響力は他寮の比ではない。

子供同士と言って許されないのだ。自寮での生活、ひいては親や血縁関係のある親戚にまで影響する。

マグル生まれの新入生がスリザリンに入寮すると悲惨なのはこの辺りの事情も関係している。

上下関係に一層厳しいのがスリザリンの特徴でもあるのだ。

アブラクサスとジルの会話を一言たりとも聞き逃すまいと聞き耳を立てていた生徒達は自分の今後の生活と将来の為に必死で情報をかき集めようとしていた。

そんな中、つかつかと足音を立てて不機嫌そうな表情で近寄る少女がいた。

「ねえ、貴女」

「はい？」

「アブラクサスとどういう関係？」

「どういう、と言われましても……列車でご挨拶した程度ですが？」

「在り得ないわ、その程度でアブラクサスが名前で呼んで良いなんていうわけないもの」

「ヴァルヴルガ、彼女の言っていることは真実だ」
「！」
「ご不快な思いをさせてしまったら申し訳ありません。ですが私とアブラクサス先輩は本当に列車でご挨拶しただけの仲ですので……」
「っもういいわ!!」
ヴァルヴルガ、と呼ばれた少女はジルを思い切り睨みつけてから踵を返していった。
あれがヴァルヴルガか、と内心驚きはしたものの、一応マグル生まれと思われている自分が知っているのも不思議なのでそれを隠してアブラクサスへ尋ねる。
「ジル、すまないね」
「いえ……、あの方は？」
「僕の従妹だ。ヴァルヴルガ・ブラック、君と同い年」
「従妹ですか？」
「あぁ、純血貴族は多かれ少なかれ大体が親戚筋だ」
予想外とまでは言わなくともそこまで近しい関係とは思わなかったジルは聞き返すと。アブラクサスからは至極納得できる答えが返ってきた。
そうこうしている内に新入生の組み分けは終わり、上級生と他愛のない話をしながらホグワーツの食事に舌鼓を打った。
（――――ルイスの食事の方がおいしいわね）
こっそりとため息をついたジルがいたのは言うまでもない。

家族の記憶

ジルのホグワーツ生活の滑り出しは好調と言えるものではなかった。

それもそうだ。アブラクサスに名を呼ぶことを許されたといっても、その親戚で純血貴族の筆頭とも言えるブラック家の人間に睨まれている。

更には生まれが良くなかった。半純血とはいえ半分は魔法族ではない――ただの人間（マグル）の血が入っているからだ。それだけで純血貴族の家系に属する子供たちは一歩引いてしまう。それは親の思惑であったり。己に利があるのかと見定めるためであったり、そして何よりも自分自身を守るために。

同室になったのは偶然にもマグル生まれと半純血。

ナディア・メロウ。

マグル生まれで茶色のくせっ毛がチャームポイントの少しドジな部分が目立つ愛嬌のある子だ。

対して半純血のカテリーナ・ドラフォニア・ラメルトはどうやらウィーズリー家の親戚らしく、燃えるような赤毛が魅力的だ。とても理知的で母親が魔法族とのことで様々なことを知っている。

最初こそお互い腹の探り合いをしていた三人だったが、ある出来事がきっかけで今では普通に話す仲になった。……とはいってもそれは女子寮の室内、三人だけの空間に限られていた。

部屋から一歩出ればスリザリンでは純血は勿論のこと、更には半純血とマグル生まれの差は歴然としている。

食事のテーブル、授業を受ける座席、休み時間に一緒にいる相手、様々なところでだ。

規則として決まっているのではない。

生徒たちの中で決まっているのだ。

故に三人が話を出来るのは就寝時間前と朝起きてからの少しの時間だけだった。

それでも各々で出来ることをしては相談し合い、時折助け合いつつ日常生活を送っていた。

夜。

ジルは地下にあるスリザリン寮の自室でルイスと連絡を取っていた。

他の二人は談話室で先輩に勉強を教えてもらっているため一人だった。

「それで進捗の方はどう？」

『万事滞りなく、と言いたいところですが一点手こずっております』

「あら、珍しいこともあったのね。どうしたの？」

可愛らしい使い魔から発する声はルイスの声は珍しく疲れを滲ませていた。

理由を聞けば、どうやらジルに命じられた先の件――――サラザール・スリザリンの遺品を探し出せ――――で伝手を辿り、いくつかは集ったもののある人物がサラザール・スリザリンの遺品を何個か財産として持っているがどう交渉しても譲ってもらえそうな気配がないとのことだった。

『申し訳ありません……』

「構わないわ、いくつか確保できただけでも上出来だもの。手元にある分はルイスの方で保管しておいて。夏季休暇の時にでも見るから。あとはそうねぇ、今週末、ホグワーツを抜け出すからホグズミートで落ち合いましょう。そのままその交渉相手のところへ連れていてくれる？」

『かしこまりました。そのように手配いたします』

「それとあとでふくろう便でいいから食事を届けてくれる？ホグワーツの食事って不味くないんだけど貴方が作るものの方が美味しいのよね」

『ふくろう便での輸送の時間も考慮しますと二時間ほどかかりますがよろしいですか？』

「えぇ、出来れば日持ちするものをいくつか用意してくれると助かる

わ。温めるのは魔法で出来るし」
『御意に。それでは諸々手配を済ませておきます』
「えぇ、それじゃよろしくね」
通信を切り、ジルはふと窓の外へ目を遣る。
窓の外ではしんしんと雪が降り、白一色に染め上げていた。
ジルが入学してから約半年。ひっそりとだが友人も多く出来、授業に至っては元よりルイスのお墨付きであるし、教授たちからも5年生に匹敵すると言われ頭角を現していた。
時折勉強を教えてもらいに来る生徒もいる。特に知識に貪欲なレイブンクロー生やスリザリンの同級生、極稀に上級生も現れるほどだ。
就寝時間が近づき、ルームメイトの友人二人が戻ってきて開口一番に聞いたのはジルの知識についてだった。
「ねぇジル？貴女のその知識って誰から教えてもらったの？」
「そうよ、ずっと聞こうと思ってたの！やっぱりご両親から？」
「いえ、私は孤児院出身なので両親ともに顔は分からないんです」
ジルの発言に一瞬固まる二人。
そういえば、ジル自身の話をこれまで聞いたことがなかったと思い至り、気まずそうな表情になった。
顔を見合わせる二人に頓着せずジルは続けた。
「それで、魔法界のことを教えてくれたのは別の方で。私自身魔力があるって分かったのが早かったので保護者としてその方がついてくれて、身を守る術として色々教えてもらったんです」
「そうだったのね」
「早くから魔法界のこと知ってたなんて、うらやましいなぁ」
マグル生まれは往々にして魔法界のことを知るのは入学許可証が来てからだ。
故に魔法界で生まれた子供とマグル……人間界で生まれた子供とでは入学時点で大きな差があるのだ。その差を埋めるには多大な努力が必要になるわけだが基本的にホグワーツでは差が広がらないように配慮されている。

「私、自分が魔女だって知るまで結構大変だったの。だってそうでしょ？当たり前だけど両親は何も知らないし。スラグホーン先生が事前説明に来て知ったけど、私って他の子より魔力が感情に影響されやすいらしくて、もっと小さい頃は泣くとよく物が壊れてたんですって」

正直なことろ両親はよく私のこと愛してくれたなって思う時があるわ。

ナディアはそう言って枕元に置いてある両親の写真を見つめた。

魔法族の写真ではないそれは当たり前だが、映っている人物が動くことはない。

マグル生まれのナディアからしたら当たり前だが魔法族の親を持つカテリーナは不思議に思い、ナディアと一緒に見つめていた。

「うちは、ママが魔法族でパパがマグルなんだけど、最初はやっぱり信じられなくて、喧嘩したんだって！　で、結局あまりにも信じてもらえないからママが怒ってパパに魔法をかけたの。それも、変身術よ！猫に変えちゃったの！パパったらびっくりして辺りを走り回るわ、塀を飛び越えるわで、戻すのが大変だったってママが言ってたわ」

マグルの中では不可能とされている、物語の中だけの変身を体験したマグルは怯えるか感情が振り切って喜ぶかのどちらかだが、カテリーナの父は後者だったようだ。

そんな二人の話を聞いている内にジルは前世の自分の両親を思い出していた。

幼少期から他の子供と違った自分を親はどう思っていたのだろうか。

思い返してみれば、おぼろげではあるが二人とも笑顔の記憶ばかりだ。

まるで、そう。幸せな家族を演じているような。

ジルの顔に自嘲染みた笑みが浮かんだ。

自分はどうやら生まれ変わっても家族に縁がないらしい。

オブリビエイト

ジルはおおよそ一年ぶりに出身の孤児院へ戻っていた。
ホグワーツが夏季休暇に入るためだった。
本来であれば孤児院ではなく、ルイスに購入させた一軒家の方へ行っても良かったが、あそこは過剰すぎるほどの防護呪文が山ほどかけられている。
タチアナ家が蓄えた知識の中の、今では『失われた魔法（ロスト・マジック）』と呼ばれる古の魔法やジルが新しく作った呪文であったり。思いつくままに重ねがけをしたおかげか、並みの闇祓いでも突破できないほどのセキュリティとなっていた。
下手すると貴族の屋敷よりも厳重なあの家では、ホグワーツからの手紙も受け取れないし、何より今はジル自身がトムに会えないと思っていたからだ。
トムとはホグワーツにいる間、月に何度かは手紙でやり取りをしていたが直接会うのは去年の夏、ホグワーツに入学する前日が最後だった。
今年、トムがホグワーツに入学する。
原作通りに進んでいるのは簡単にだが確認は済ませた。
ダンブルドアがトムに対して危機感を覚えていたこと、けれどジル（私）がいることで一線を越えないだろうという期待と安心感を抱いていること。
……けれど、そうなってしまってはジル（私）が困るのだ。
だから、トムの記憶を消さなくてはならない。
闇の帝王へと進む弟（トム・リドル）へと、変えねばならない。
「あぁ、こうなると理解（わか）っていたのに」
道筋から外れるようであれば、消してしまえばいいと思っていたあの時の自分を止めたい。
頭を巡るのは、短い間だったがトムと過ごした日々だ。
物静かで、必要なこと以外には口を開かない大人しい子。

その内側では恐ろしく計算高く、他人を損得で判断する利己的な賢い子供。
けれど、ジル(私)といる時だけは少しだけ違うことをジル(私)は知っている。
知的探究心が強く、ジル(私)が読んでいた本を追うように手にしては理解しようと頭を働かせ、それでも分からないことがあると無表情を装いつつもその裏側で面倒に思われていないか心配する、小さな子供だった。
いつの間にか、絆されていたようだ。
自分で思うよりずっと、弟(トム)の存在は自分の中で大きくなっていた。
「それでも……私は、」
彼に逢うと、逢いに行くと決めたのだ。
それにもう、決めていたじゃないか。
例え唯一(おとうと)の肉親を犠牲にしても。……そう決意していたじゃないか。

ルイスに用事を言いつけ、今日はもう来なくていいと告げてからジルは正装に着替えるといつもの位置に杖をしまい込む。
ホグワーツに入学する際、ルイスとともに訪れたダイアゴン横丁で自らの杖を購入していた。
材質は黒檀。芯はアクロマンチュラの糸を使用し、アッシュワインダーの灰でダークグレーの色付けをしており、持ち主に忠実な使い勝手のいい杖だった。
私(ジル)に相応しい杖だ、そう心から思った。
「先にトムの問題を片付けなくちゃね」
あの日の夜に、己に誓ったことを反故にするほど甘ったれにはなりたくない。

ジルが家に向かったのはちょうど昼の時間帯だったせいか、トムは

まだいなかった。
食事は孤児院で取るように言っておいたのだが、きちんと守っているようだ。
周りの視線や悪意から逃れられるこの環境が無くなるのはトムにとって致命的だからだろうが。
しばらくすると、幾重にもかけた防護呪文の一つ、訪問者の知らせが鳴り、トムが来たことを知らせる。
「おかえり、トム」
「帰ってたの？」
「ええ、つい先ほど」
短い挨拶を交わしていると、トムはちらりとジルの様子を伺いながら口を開いた。
「ねぇ……ホグワーツってどんなところ？」
「とても愉しいところですよ」
ジルの微妙な言葉の差異にトムは気付かずに期待に目を輝かせ、矢継ぎ早にジルへ質問する。
「授業は？先生は怖い？どんな魔法を教えてもらえるの？」
「ト、トム？」
「……友達は、出来た？」
小さく、ポツリと落とすようにトムの口から吐き出されたその質問にジルは一瞬目を瞠る。
「……ぁ、……なんでもない」
「出来ましたよ。大丈夫、きっと貴方にも出来ます」
失言だったとばかりに目を逸らしたトムに、ジルは笑って答える。
貴方が望む理想の友達になるのか分からないけれど。
そんな言葉を内心で付け加えながら、ジルは微笑んだ。
「……そう」
「トム」
「何？」
「……いいえ、なんでもありません。知人から良いものを貰ってきたんです。一緒に食べましょう」

ジルがそう言って取り出したのは、魔法界のお菓子とルイスに作ってもらったサンドイッチだった。
トムはよく観察しなければ分からない程度だったが魔法界のお菓子に興味深々らしく僅かに目を輝かせて見つめていた。
「これは？」
「蛙チョコレートですね。開ける時は気をつけてください。跳ねますから」
「跳ねる？チョコレートが動くの？」
「えぇ、写真に映ってる人間も動きます。中からいなくなったり」
「いなくなる?!」
「魔法界は驚きの連続ですよ、ふふ」
最初から知っていた自分と違い、トムの新鮮な反応に笑みがこぼれる。
「ダンブルドア教授から聞いてるかもしれませんが、ホグワーツでは四つの寮に分かれて生活します。勇猛果敢なグリフィンドール、狡猾なスリザリン、勤勉なレイブンクロー、忍耐強く優しいハッフルパフ。私はスリザリンに組み分けされました。トム、スリザリンではマグル……非魔法族の差別が根強く残ってます。いえ、今後も緩和されることは無いでしょう。だから、貴方は純血を名乗りなさい。無名の家でも純血で、非魔法族の親戚に引き取られていたと話せばいくらか態度は軟化します。恐らく、トムも私と同じスリザリンに組み分けされると思います。そして、スリザリンで私がどうなろうと関わらないことを必ず守ってください」
「それって」
「貴方を守るためでもあり、私自身のためでもあります。何より、貴方はスリザリンで〝真の友を得る〟でしょうから」
組み分け帽子の言うことをなぞって伝えれば案の定興味を持ったのかトムは繰り返す。
「真の友？」
「えぇ。スリザリンはその性質上他寮から少々遠巻きにされてますから、その分自寮の結束が固くなる傾向があるらしいですよ」

「へぇ……随分嫌われてるんだね、スリザリンって」
柔らかめの表現を使ったが聡いが故にそこに隠された意味を察してトムは苦笑交じりに言いつつ肩をすくめた。
「でもどうして僕がそこに組み分けされると？」
「私がスリザリンである以上、弟であるトムにも十分その可能性はありますから」
「確かに。にしても真の友、ねぇ」
半笑いで小馬鹿にしたようなトムの呟き。
孤児院に入れられた身としては、親の愛情が絶対ではないことを知っている以上、真の友情とやらもあるわけがないと思っているのだろう。
事実、それはトムだけではなくジルもそう思ってのことだ。
「トム、バーティボッツの百味ビーンズです。どうぞ」
「百味？」
何この色、と嫌悪感たっぷりの表情をしてジルが渡した粒を眺める。
黄色に黒いまだらのビーンズだ。
「（多分）美味しいですよ。文字通り、百味なので」
「これ、絶対妙な味でしょ」
「食べてみてのお楽しみです」
「これ僕が食べなきゃダメなの？」
「手に持ったら食べる、それが百味ビーンズのセオリーですよ」
ホグワーツでは確実に起こる出来事でもある、と言えばトムは渋々（本当に渋々）ながらもビーンズを口に放り込んだ。
……が、すぐに口を抑えて悶え苦しんでいた。
「ッ……!!」
「その様子だと外れたみたいですね。色から察するにマスタードかなにかですかね」
キッと睨みつけるトムだが、ジルからしてみればまだまだ迫力不足だ。
ノクターン横丁にいる人攫いですら脅威に思えないのだから、１１

歳の子供に睨まれたところで痛くも痒くもないだろう。
ジルは肩を竦めてから、百味ビーンズを一つ無造作に取るとそのまま口の中に放り込んだ。
咀嚼するうちに感じたのは微微妙な清涼感と後から押し寄せてくるこれまた微妙な嘔吐感。
「こ、れは……石鹸味……！」
「っく……ふふ、あはは！自分でも妙なのに当たってるし！」
滅多に見ない笑顔のトムに、ジルの心は僅かに軋む。
こんな笑顔を見せてくれることも今後は無いだろうと。
それが少しだけ、ほんの少し、寂しく思えた。
「トム。いつか思い出す時が来たとしたら、私のことを怨んでいいから」
「え？」
「――――忘却せよ（オブリビエイト）」

一瞬の躊躇いの後に杖の先から放たれた閃光がトムへ向かっていく。
どうして、と問いたげな表情に酷く胸が痛む。
けれど、全ては『物語の筋書き』のために。
――――自らの、我儘（エゴ）のために。
ゆっくりと崩れ落ちたトムの体を受け止め、ジルは姿現しでトムの孤児院に飛んだ。
古びたベッドの上にトムを寝かせ、そっと額にキスを送る。
最後の親愛のキスだった。
ぽたりと一粒の雫がベッドのシーツに染み込んだ。

ホグワーツ卒業〜
特異点とその裏側で

闇の魔法使い達が頭角を現し、暗黒の時代へ移りつつある中、死喰い人と呼ばれる一団の中に一人の女がいた。一族で死喰い人になる者達もいるため、それほど珍しいわけではなかったが、その女は特に異色を放っていた。

そんな彼女が何故、死喰い人に混じっているのかというと、ある日彼女はふらりと隠れ家にやって来て警戒する死喰い人、それもヴォルデモートの側近と言われる実力者達に囲まれながらも飄々とした様子でこう宣う。

「ヴォルデモート卿に会いに来ちゃった」

茶目っ気たっぷりにウインクして笑った彼女。その言葉に真先に感情を爆発させたのは一番の狂信者であり、ヴォルデモート卿に目をかけられているベラトリックス・レストレンジだった。

「この無礼者が!!我が君の手を煩わせるまでもないッ!」

ベラトリックスが捻じ曲がった杖を彼女に向けたその瞬間、杖ごとその体は壁に叩きつけられていた。

鈍い打音とベラトリックスの苦痛に満ちた呻き声でようやく事態を理解した死喰い人達は一斉に杖を向けた。だが、彼女がつま先でトン、と軽く足音を鳴らすと一陣の風が吹き、気付けば全員が地に伏していた。

唯一、一番最初に吹っ飛ばされたベラトリックスだけがかろうじて意識を保っていた。

「騒がしい、一体何事……」

「あら、」

屋敷内の騒音を聞きつけたヴォルデモートが不機嫌そうな様子で

扉を開けて目にしたのは下僕である死喰い人達が全員軒並み倒れており、中でも特別目をかけており自分を慕っていたベラトリックスの状態を見て一気に頭に血が上った。
「貴様……何者だ」
今にも怒りを爆発しそうな空気を醸し出すヴォルデモート。
常人であれば恐怖のあまり気絶してもおかしくないほどの圧力を受けて尚、彼女は何事もないような、むしろ愉快そうな表情を浮かべて笑っていた。
「Ｈｅｌｌｏ，ミスター。貴方とお話しに来たの」
「話だと？私の部下をこんな目に遭わせておいて話とは笑わせる」
「だって貴方に会いに来ただけなのに杖を向けられちゃったから。売られた喧嘩は買わなくちゃ」
「……話とは何だ」
「貴方が今一番望むものを持ってきたの」
「――――ほう？」
闇の帝王。そう呼ばれるようになったのはヴォルデモート自身が言い出したことではない。それに見合った実力、カリスマ性、そして何よりそう呼ばれるようになった出来事があった。
これはいくつかる出来事の一つとして語られることになる。

「言ってみろ」
「あら、此処で言ってしまっても良いのかしら？」
「……さっさとしろ」
「ジル・リドルに行方について」
瞬間、ヴォルデモートの顔色が変わる。
ジル・リドル。
本名はジル・マールヴォロ・リドル。
ホグワーツでは同じ寮で先輩後輩の関係であったがほとんど関わることもなく、話をした記憶もほとんどない、自身の姉。
卒業後、どこかの研究所に就職したと風の噂で耳にはしていたが、具体的な居場所は突き止められずいつもどこかで気にしていた存在

だった。
その姉の所在を知ると言う怪しげな女。
「……来い」
「我が君！そんな怪しい者を」
「黙れ。私の決定にけちを付ける気か？」
「ヒッ……も、申し訳ありません。御心のままに……！」
殺気を含んだ視線とともに感じる重圧に耐え切れず死喰い人の何人かは気絶してしまった。
女は足元に倒れ付す死喰い人達を器用に避けると黙ってヴォルデモートの後をついていく。

長く薄暗い廊下を通り抜け、ある一室へと二人は入る。
すぐに屋敷しもべが紅茶とお茶請けを用意してそれぞれの目の前に置くと恭しく頭を下げて姿を消していった。
一口飲み、女は口を開く。
「本題に入りましょうか。ジル・リドルの行方について」
「……」
目線だけで先を促す。
女はワインレッドの唇を吊り上げて、笑みを浮かべている。
「――久しぶりね、トム」
形の良い唇から紡がれた言葉にヴォルデモートは目を見開いた。
「なっ……、お、前は……」
今の今まで気付かなかった。
「何故……こんなことが、あるわけがない」
目の前にいるのは紛れもなくあの女じゃないか!!
「魔力操作による認識の妨害、錯覚。昔、貸した本に書いてあったでしょう？それとも……また慢心していたのかしら？」
笑みを深くしたジルは久方ぶりに相対した弟をじっと見つめた。
あの頃のまま大きくなった目の前の弟は正しく歴史を辿っていた。

唯一、自分の行方を探していたこと以外は。
「それで、かのヴォルデモート卿がわざわざ私を探していたのは何か理由があったからなんでしょう？出向いてあげたわけですし、勿論それ相応の理由はありますよね？」
驚きから声も出ないヴォルデモート、否、トムはこの時ばかりは闇の帝王という名に似つかわしくないほどに狼狽しており、最後に見せたのはいつかも分からないような素の表情を晒していた。
「……ぃ」
「え？」
しばらくの沈黙の後、微かに聞こえた声にジルが顔を上げると。くしゃりと顔を歪めたトムが唇を噛み締めてポツリと言った。
「……理由など、ない」
「トム、貴方……」
「……ずっと不思議だった。ホグワーツに行って初めてお前と出会ったはずなのに心の奥でもう一人の自分が言うんだ、『悲しい、悲しい、……愛しい』。それはお前が視界に入る度に繰り返された。血縁なだけで、関わりも会話もしたこと無かった筈なのに」
握った拳からポタリと血が落ちる。トムは自身の杖を抜くと杖先をジルに突きつける。
「お前は僕に何をした!?何を知っている!!洗いざらい吐いてもらう！さもなくば……!!」
「……トム、貴方はそれを知ってどうするつもりですか？今更、私が貴方に何をしたのか知っても過去は変えられない。それならばそんな想い消してしまった方がお互いの為なのでは？それとも……私という姉の存在に、夢でも抱いてます？自分が、愛される存在だと？想われているはずだと？」
「……れ」
「まさか闇の帝王と呼ばれる者が『愛』なんてものに恋焦がれてるんですか？」
「黙れッ!!」
トムの杖から緑色の閃光が放たれる。

至近距離から放たれたそれは防御の間もなくジルに直撃した。
ゆっくりと崩れ落ちるジル。
冷めた紅茶が赤い絨毯に染みを作る。
刹那、我に返ったトムの脳裏にかつての記憶が蘇る。
術者の死亡によるかけられた魔法が解除されたせいだ。
それは幼少期、ホグワーツに入学する前の記憶だった。
『初めまして、トム。私の可愛い弟』――――初めて出会った時のこと。
『貴方は孤独じゃないの。これからは私がそばにいるわ』――――初めて泣きそうになった日のこと。
『トムは勤勉ですね。何か目指しているものがあるんですか？』――――初めて己が目指しているものが明確になった日のこと。
『魔力というものをまずどういうものか理解する、それが上達への一番の近道ですよ』――――初めて魔法というものについて教えてもらった日のこと。
『それじゃ、次はクリスマス休暇に戻ってきますね。元気で』――――初めて離れるのが寂しいと感じた日のこと。

そして。

『トム。いつか思い出す時が来たとしたら、私のことを怨んでいいから』

黒壇の杖が向けられる。
その更に向こう側で、静かに涙を流している姉の姿。
唱えられた呪文は〝オブリビエイト〟。

そうしてヴォルデモートは、トムはようやく理解した。
どうしてあれほど、ジルの姿を目にする度に悲しい気持ちがこみ上げるのか。
何故、会ったことがないはずの姉にこんなにも感情が揺さぶられていたのか。

卒業後も彼女の行方を捜して会おうとしていた事も。

「詰めが甘いんだよ……」

どうしてもっと、きちんと記憶を消してくれなかったんだ。

中途半端に残された記憶のせいで、唯一の心残りになってしまっていた。

自身でも抑えきれない不可思議な感情があふれ出す。

そっと頬を伝う雫を拭うこともせず、トムは力なく呟く。

「……どうして」

床に力なく横たわる彼女へと手を伸ばし、まだ暖かい彼女の頬へと手を添える。

「アンタほどの実力なら、さっきの呪文だって防げたはずだ……なんで、」

そう問うても答えはない。

彼女は答えない。否、答えられない。

彼女を物言わぬ死体へと変えたのは他ならぬトム自身だ。

トムがそっと彼女の体を抱き締めると、かつて慣れ親しんだ柔らかな甘い匂いが鼻をついた。

「……必ず、蘇らせる。何故僕に忘却術をかけたのか、きちんと直接聞かせてもらうからな」

爛々と輝くその赤い瞳には確固たる決意が宿っていた。

場所は変わって、イギリス、ロンドンの郊外にあるタチアナ邸の一室。

古めかしい外観の館だが、その内装は落ち着いた品のある、見る者が見ればその価値が分かるものばかりだった。
そんな館の一室、大きな本棚にずらりと並べられた禁書、中央には大人が三人は横になれるほどの大きな机、最高級の皮で造られた上質な肘掛け椅子。
そこに腰掛けるのは腰まである長い髪を横に流して妖しく笑う女、そしてその横には少年がいた。
「よろしかったのですか？」
「仕方ないでしょう。それにしてもある程度の知識を残しただけでここまで影響するとは思ってもなかった。綺麗さっぱり消しておくんだったわ」
執務机に並べられた四つの魔道具が映し出す映像を見ながら女はため息混じりに呟いた。
「それこそ仕方ないことかと。それよりも、この後の対処は如何なさいますか？」
「死体はあのままで構わないわ。トムの記憶もそのままに」
「御意に」
少年はそう返しつつ慣れた手つきで紅茶を淹れていた。
そっと差し出されたティーカップを受け取り、一口含むと女はほう、と息を吐いて肩を落とした。
「うん、相変わらず美味しいわ。ありがとう、ルイス」
「ありがとうございます、ジル様」
「ルイス？」
「失礼しました。今はディアナ様でしたね」
ルイスの言葉にジルは、否ディアナは微笑みで返す。
視線の先には、自分と同じ顔の女の体を抱きしめて静かに涙を流す唯一の肉親の姿。
何者にも悟らせない完璧な笑顔でただその様子を見つめていた。

秘密と計画の行方

「ルイス、ちょっと出かけてくるわ」
「かしこまりました。お帰りは何時ごろになりますか？」
「遅くはならないと思うけど、夕食の準備は要らないわ。用事が済み次第連絡するわね」
「お願い致します。それと、こちらをお持ちください」
そう言ってルイスが差し出したのは、羊皮紙の束をまとめたものだ。
これからどこへ向かうかを察してルイスが用意したものだった。
それが何なのか気付いたジルは苦笑してからそれを受け取り、「行ってくる」「お気をつけて」と短くやり取りをすると黒壇の杖を振り、姿くらましをした。

バチン！と鋭い音がしてジルが姿あらわしをしたのはホグワーツに程近い、魔法使いの村ホグズミードだった。
治安の悪化が進んでいるせいか、人影は少なく、行き交う人々の表情も暗いままだ。
ジルはローブを被りなおすと、ゆっくりと足を進める。
在学時代、何度か世話になったバーのドアを開けて店内を見回すと、目的の人物がひっそりと端の方でグラスを傾けていた。
「お久しぶりです。お待たせしました、ダンブルドア教授」
「おぉ、よう来たの。元気だったかね？」
「えぇ、恙無く。教授もお元気そうで何よりですわ」
ジルはダンブルドアの隣に座ると学生時代からお気に入りで飲み続けているワインを注文した。
二人以外に客もいないため、マスターはすぐにワインを用意してジルの前に置いた。

「相変わらず此処は良いワインを入れてますね」
香りを楽しんでからグラスを傾けて一口含む。
ルイスの用意してくれるワインも悪くはないが、やはり長い間親しんだこの味が一番美味しく感じた。
「良い飲みっぷりじゃの」
「教授こそ。それ、この店で一番強いやつでしょう？」
「なに、若気の至りで飲み始めたら存外慣れてしまっただけじゃ」
「ふふ、教授はいつまでも変わらないですね」
「ジル、君も変わっておらなんだ。……卒業してから何年経っても」
穏やかな会話の中に突然投げられた発言にも動じずにジルは微笑みを浮かべたままだが、反対にダンブルドアの表情はいつになく硬く、警戒しているように見える。
いつも飄々としている老人にしては珍しく、ジルは心の中で僅かに驚いていた。
「ニコラスですら老いには勝てなんだ。それをどうやったのかね？」
「あら、女の秘密を探ろうなんてナンセンスですよ？」
「これは手厳しいのぅ」
「一つだけ言えるとすれば、そうですねぇ。ある意味分霊箱や賢者の石よりも万能で汎用性が高いとだけ」
「！」
グレーの瞳が鋭くジルを見つめる。
「ジルよ、おぬしはどちらじゃ？」
「私は、どちらでもありませんよ。ただ自らの目的の為に、成すべきことを成すだけですから」
「……」
「開心術をしかけても無駄です、これでも閉心術に関しては折り紙つきですので。……あぁ、そうでした。これをどうぞ」
無言呪文を使って執拗に開心術を仕掛けてくるダンブルドアを面倒だと言わんばかりの表情を向けて言うとジルはある物を差し出した。
それは出かける直前、ルイスが渡してきた羊皮紙の束だった。

「……これは？」
「貴方が欲しいであろう情報が書いてあります。感謝してくださいね？うちのルイスが直接調べたものです。正確性については保証します」
羊皮紙を開いたダンブルドアが驚愕に目を瞠る。
そこにはまさに求めていた、必要な情報が漏れなく記されていたのである。
現在の死喰い人のリスト、まだ生きている行方不明者の所在、そしてヴォルデモート自身の現在。
事細かに記された情報、その最初の数行だけでもダンブルドアや騎士団だけでは入手できなかった情報ばかりだった。
「おぬしはこれを読んだのかね？」
「いいえ。必要があればルイスから報告があるでしょうし」
「随分と信用しておるんじゃな」
「ええ、私の目であり、耳であり――――手足ですから」
事実、ルイスはホグワーツから抜け出せないジルに代わり、多くのことをこなしてくれた。
サラザール・スリザリンの遺品探し、拡大する闇の勢力への偵察など、かなり無茶振りした自覚があるジルは過去――前世も含めて――で唯一と言っていいほど、ルイスを信用している。
自分の不利になることは絶対にしない、絶対服従、自らの意思のままに動かせ、自分だけでは足りない、届かないところにも届かせるための、手足なのだ。
ジルは探るようにこちらを伺うグレーの瞳を見つめ返していつもの微笑みを浮かべた。
「お主は、血縁が……弟が死ぬことに何の感情も持たぬのか。ホグワーツに入学する前は仲が良かったと思ったんじゃがのぅ」
「そんな感傷（もの）、とっくのとうに捨ててますよ。言ったでしょう、私は自らの目的の為に、成すべきことを成すだけだと」
「……トムを止める気はないようじゃな。それにおぬしの目的とは何じゃ」

「そうですねぇ、今言っても特に流れに問題は無いと思いますけど……でもやめときます。必要になったら会いに行きますからその時にでも。では、他にも行くところがあるのでこれで失礼しますね。マスター、ワインのお金は後ほどルイスから届けさせますから」
「、待つのじゃ！」
ダンブルドアの制止を気にも留めず、ジルはその場で姿くらましをした。
一人残された老人は浮かせた腰をもう一度降ろして、深くため息をついた。

一瞬にして切り替わった景色は、薄暗いバーから黄昏に染まった郊外にある屋敷の前へと変化している。
めくらましの呪文をかけられているせいか、空を飛んでいる鳥たちは不自然な経路で屋敷の屋根を避けていく。
見た目は廃墟のような、見るからに誰も住んでいなさそうな屋敷だが、実際は闇の勢力とは違う、別の勢力が集まるアジトの一つだった。
その屋敷の前ではウルフカットの精悍な顔つきの青年がジルに気付くと口角を吊り上げて言った。
「ようやく来たか」
「えぇ、待たせたわね」
「かまわねぇさ、アンタが来なきゃ意味がねぇしな」
「エディは？」
「もう着てるぜ。それに、アリスの奴もな」
「それは重畳」
薄暗い廃屋に入り、奥へと進む。ところどころ荒れ果てて痛んでおり、ルイスは直そうとしていたがそうそう頻繁に使う場所でもないため止めていた。
青年――ショーズは紳士よろしく扉を開けて脇に退いた。
「お久しぶりですね、マイレディ」
「久しぶり、エディ。元気そうで何よりだわ。それにアリスも」
「アリスはいつでも元気だよ？お姉ちゃんも元気？」

「ええ、もちろん。それじゃ早速、例の計画について進めましょうか」
ジルの形の良い唇が弧を描き、集まった三人は頷いて同意を示した。